

京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印

内記 理

1 はじめに

今日、京都大学吉田キャンパスがある一帯が、幕末の激動期において、各藩の藩邸の用地として用いられたことは、すでに周知のこととなっている（五十川1981, 浜崎1983など）。慶応4年（1868）に描かれた京都の絵図である「改正京町御絵図細見大成」をみると、幕末の京都市中とその周辺にどのような施設が存在したかを知ることができる。絵図の中でも、今日京都大学吉田キャンパスがある吉田周辺に目を向けてみよう（図53）。まず、高野川と鴨川が合流する地点の付近から東に延びる通りがあるが、その通りの北には「土州屋敷」（土佐藩邸）が、そして、南には「尾張屋敷」（尾張藩邸）が確認される。これらの藩邸の存在は、幕末より前の時代に描かれた絵図では確認されないため、幕末になってか

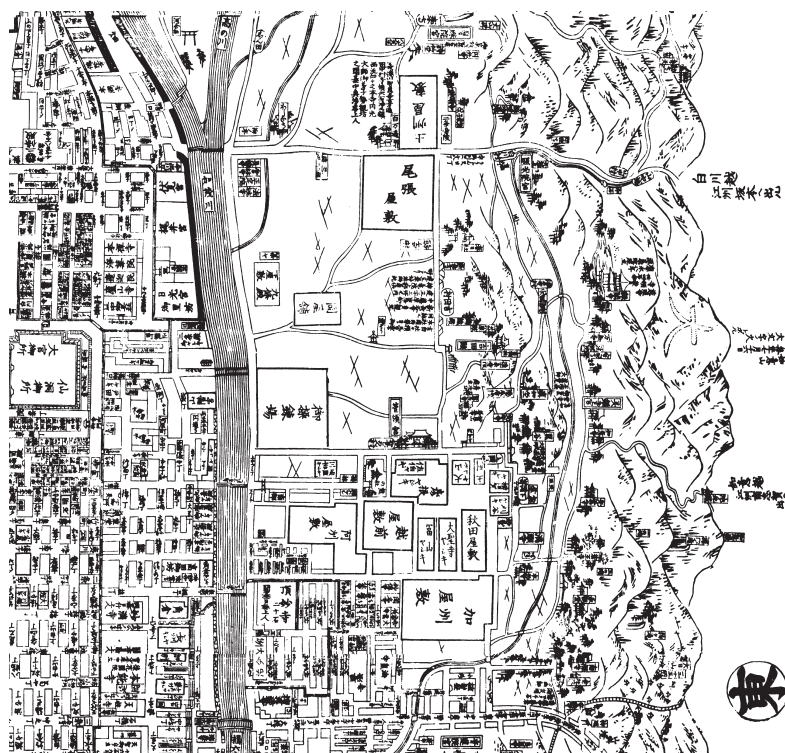


図53 幕末における吉田周辺（「改正京町御絵図細見大成」を改変）

ら建てられたものと思われる⁽¹⁾。これらはそれぞれ、現在の京都大学吉田キャンパスのうちの、北部構内と本部構内に重なる地点である。

また、絵図の中で吉田周辺より南に目をうつし、「熊の社」（熊野神社）の周辺から岡崎にかけての一带をみると、「彦根屋敷」や「阿州屋敷」、「加州屋敷」などが描かれる。吉田周辺と同様に、この地域にも各藩の藩邸が建てられたことがわかる。これらのうち、「阿州屋敷」（徳島藩邸）が描かれる地点は、現在の京都大学吉田キャンパスの熊野構内に重なる。

以上の絵図における描写から、幕末期においては、現在の京都大学の北部構内に土佐藩邸が、本部構内に尾張藩邸が、熊野構内に徳島藩邸が所在したことが想定される。

これらの藩邸のうち、吉田キャンパス内でおこなわれた発掘調査によって考古学的な裏付けがとられたものが、北部構内と本部構内にそれぞれ所在したと想定された、土佐藩邸と尾張藩邸である。それらの構内における発掘調査では、幕末期の遺構が検出され、また、土佐や尾張とのかかわりを示す遺物が出土した。また、熊野構内における発掘調査でも、幕末期頃にかかると考えられる遺構が検出された。絵図から存在が想定された徳島藩邸とのかかわりが想像されるものの、現段階では、出土遺物の内容による比定はできていない。

上述のように、土佐藩邸と尾張藩邸の比定には出土遺物が用いられたが、遺物の中でもとくに、瓦が果たした役割は大きい。近世につくられた瓦の中には、刻印を捺されたものが存在する。刻印は、瓦を生産した瓦工や工房を示すと考えられる。北部構内や本部構内の幕末期の遺構からみつかった瓦のいくつかも、刻印をもつ。そして、それらの出土瓦の刻印について検討することにより、それらの瓦が、土佐や尾張の国元から京都へもたらされたものであることが確認された（浜崎ほか1995、伊藤ほか2007）。近世瓦の刻印を検討することで、遺跡の性格が判明し、さらには、遠隔地からのものの移動が説明されたのである。このように、近世の考古学の研究において、瓦の刻印がもつ潜在性は大きい。

このように、土佐藩や尾張藩とのかかわりがある刻印をもつ瓦がみついている一方で、京都大学吉田キャンパスの発掘調査では、それらの藩とはかかわりのない刻印をもつ瓦もみつかった。これらの瓦については、これまでに十分な検討がおこなわれていない。1つの理由は、それらが、数量的に少量であったためである。また、もう1つの理由は、京都近隣における刻印の集成作業がこれまでににおこなわれておらず、京都大学の構内遺跡から出土した瓦の刻印を、他の資料と比較することが容易ではなかったためである。

ところが、2015年におこなわれた熊野構内の発掘調査において、まとまった量の、刻印をもつ瓦が発見された。第4節で紹介するように、そこには多様な刻印が確認される。一

方で、2017年の夏に、大阪歴史博物館において、画期的な主題をもつ研究集会が開催された。それは、埋蔵文化財研究会が主催した「幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通—」と題された研究集会である。この研究集会は、近世における瓦の生産と流通について、全国規模での検討を試みるために開催された。そして、この研究集会の準備と併行して、全国の瓦の刻印の集成が図られた。その集成は、研究集会の資料集として刊行された（埋蔵文化財研究会2017）。編者が断っているように、内容は暫定的なものであり、網羅的なものではないものの、このような全国での刻印の集成が試みられたことにより、今後は、全国の近世瓦の刻印を容易に参照し、比較することができるようになった。

以上のような研究状況を踏まえ、本稿では、京都大学構内の遺跡から出土した瓦の刻印を整理し、紹介する。基本的には、これまでに報告された資料を提示するが、あらたに2015年度の熊野構内での調査で出土した瓦の刻印も紹介する。第2節では北部構内から出土した近世瓦の刻印を、第3節では本部構内のものを、第4節では熊野構内のものを、第5節では吉田南構内のものを、そして、第6節では病院構内と病院西構内のものを、それぞれ紹介する。一通り紹介を終えた後に、第7節では改めて、瓦の京都への搬入について検討し、第8節では、京都の瓦工と刻印のかかわりについて考察する⁽²⁾。

2 北部構内から出土した近世瓦の刻印

北部構内出土の近世瓦 北部構内においては3箇所の調査地点で、幕末の遺構および遺物がみつかった⁽³⁾。遺構としては、藩邸の南を画していたと考えられる堀や、瓦溜、井戸が検出された。前述のように、北部構内には幕末に土佐藩邸が所在したと考えられる。

その想定を考古学的に裏付けたのが、北部構内の調査で大量に出土した、軒棧瓦・棧瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・袖瓦・塀棧瓦などの近世瓦である（図54）。軒瓦の文様面には、三巴文や唐草文、桐葉文などがあらわされた。また、通常では出土する比率の低い左棧瓦が、高い比率で発見された点も注目される⁽⁴⁾。土佐藩邸の屋根には、正面性を意識した左右対称の配列で、瓦が並べられていたようだ（浜崎ほか1995：103）。

北部構内出土瓦の刻印 北部構内出土の瓦には、複数の種類の刻印がみられた（図55）。確認された刻印には、「アキ兼」、「アキ文」、「アキ角」、「□（ア）キ卯平」（図55－1～4。以上は報告の中でa類に分類される。浜崎ほか1995：104）、「安喜寅」、「安喜□（岩？）」（図55－5・6。以上はb類に分類される。）、「赤野銀」、「赤戈改」、「赤の源」、「赤傳仕成」（図55－7～10。以上はc類に分類される。）、「片常」、「片重」、「片万」、「片菊」、

「片九」(図55-11~15。以上はd類に分類される。),「並生野角」,「韭生□」(図55-16・17。以上はe類に分類される。),「中友」,「中山林」(図55-18・19。以上はf類に分類される。),「御瓦師」,「いおろい栄」,「佐古吉」,「住瓦庄」,「□(福?)瓦□(作?)」などの語がみられる(図55-20~24)。

興味深いことに、刻印にあらわされる語の大半は、土佐(高知県)の地名と関係する。そして、同じ刻印の瓦が土佐に現存する古建築の屋根を葺くのに使われていることが確認された(浜崎ほか1995:103-105)。刻印の冒頭に「アキ」ないし「安喜」がつくa類とb類の瓦、および「御瓦師」の刻印をもつ瓦は、旧・安芸郡の一带(現在の安芸市本町近辺)で、「赤野」や「赤」字のつくc類は、旧・赤野村(現在の安芸市赤野ほか)で、「片」字のつくd類は、旧・片地村(現在の香美市土佐山田町)で、「並生野」ないし「韭生」のつくe類は旧・韭生野村(現在の香美市香北町韭生野)で、そして、「中」ないし「中山」のつくf類は、旧・中山田村(現在の香南市野市町中山田)で製作されたと考えられている。そのほか、「いおろい栄」は旧・五百蔵(いおろい)村(現在の香美市香北町五百蔵)で、また、「佐古吉」は旧・東佐古村(現在の香南市野市町東佐古)でつくられたと考えられている。なお、2016年の病院構内における発掘調査にかかわる笹川尚紀氏の検討により、「住瓦庄」の刻印瓦が、大阪の住吉でつくられたものであったことが判明している⁽⁵⁾。

北白川に建てられた土佐藩邸の建物は、文久元年(1861)に大阪湾警備のため住吉に建てられた陣営が、慶応2年(1866)に移築されたものである。陣営造営の際、建物の屋根を葺くために、土佐から運ばれた瓦や住吉でつくられた瓦が使用された。それら陣営で用いられた土佐や住吉の瓦が、建物が京都へ移築された際に運ばれたと考えられる。

3 本部構内から出土した近世瓦

本部構内出土の近世瓦 本部構内においては、13箇所の調査地点で、幕末の遺構および遺物がみつかった⁽⁶⁾。藩邸の西堀や南堀がみつかったほか、藩邸内を流れていた水路や、池にかかわるものと思われる粗砂の堆積が認められた。これらの遺構からは、尾張藩の特注品である「御小納戸茶碗」がみつかったほか、後述するように、尾張藩の国元でつくられた瓦が出土した(千葉ほか2006, 伊藤ほか2007)。これらの遺物が確認されたことから、本部構内には幕末に尾張藩邸があったと考えられる。

吉田に所在した尾張藩邸は、文久3年(1863)頃から明治4年(1871)まで存在した。愛知県公文書館所蔵の「吉田御屋敷之図」や名古屋市蓬左文庫所蔵の「吉田御屋敷惣図」

本部構内から出土した近世瓦

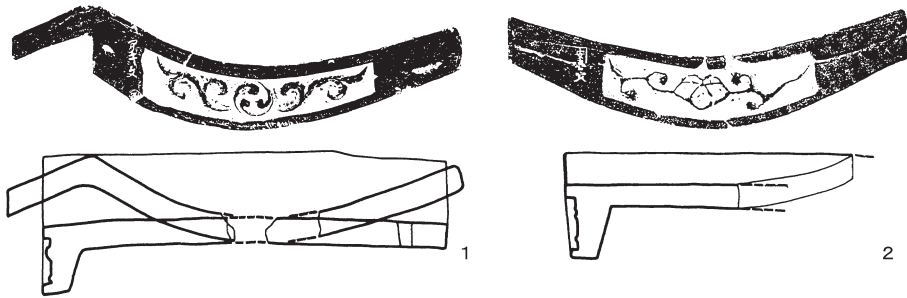


図54 北部構内出土の近世瓦（1：浜崎ほか1995, IV206, 2：IV219）縮尺1/5

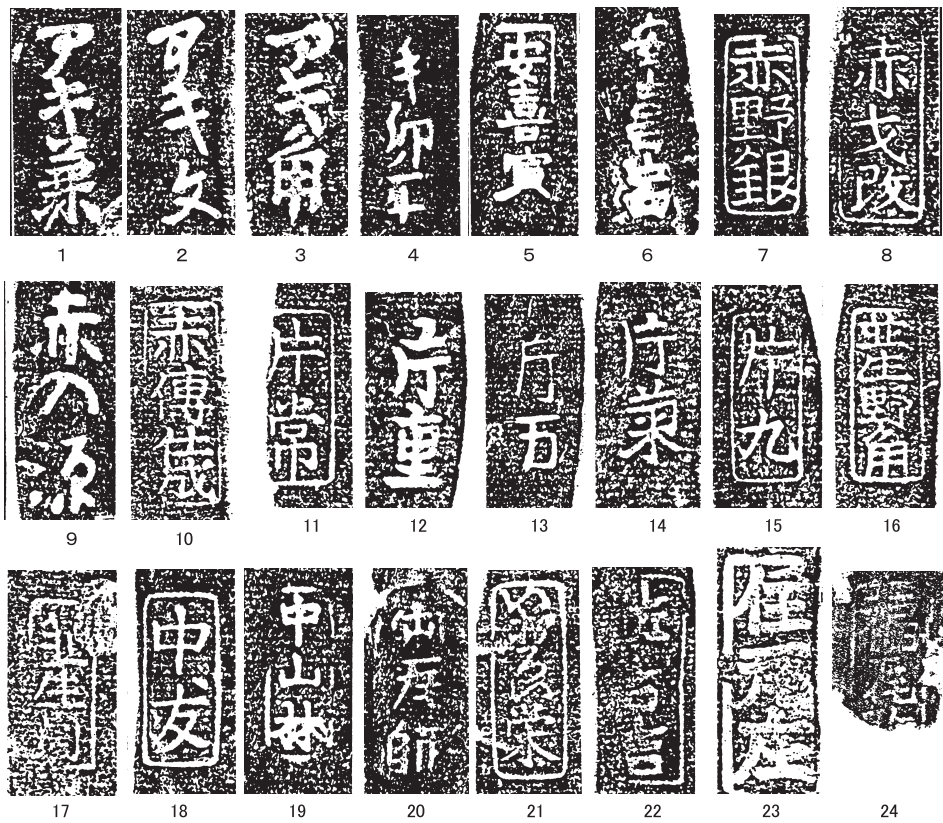


図55 北部構内出土の近世瓦で確認された刻印
（1～23：浜崎ほか1995, 図68, 24：伊藤ほか2005, II482）縮尺1/1

などの、当時の尾張藩吉田邸を描いた絵図の存在が確認されたことにより、藩邸内部の建物の配置なども明らかになりつつある。なお、絵図には藩邸内を流れる水路が描かれるが、これはまさに、発掘調査でみつかった水路に対応すると考えられる。このような、絵図に描写された内容と発見された遺構を対照する作業も進められている（伊藤ほか2007）。

本部構内においては、棧瓦や丸瓦をはじめとした瓦がみつかった（図56）。

本部構内出土瓦の刻印 瓦にみられる刻印の多くは、「作」字を円形で囲ったものである（図57-1・2）。「作」字の刻印をもつ瓦は46点みつかっており、「作」字は筆致によって2種にわけられる（千葉ほか2006：87，伊藤ほか2007：188）。同様の「作」字瓦がみつかった江戸の尾張藩邸を発掘した東京埋蔵文化財研究センターによれば、「作」字をもつ刻印瓦は、18世紀以降に尾張の常滑で、御用瓦屋であった山田庄八によってつくられたものである（内野2004：58）。国元の尾張で生産された瓦が、京都や江戸に運ばれ、藩邸の屋根を葺くために用いられたのである。「作」字のほかにも、竹管文状の刻印、「京都／大仏／東政治郎／□師」銘の刻印、「八」字を方形に囲う刻印も確認された（図57-3～6）。「京都大仏」の刻印をもつ瓦は、廃棄土坑と考えられる遺構から、「作」字刻印瓦とともにみつかった。京都で生産された瓦と、「作」字の瓦がともにみつかったことから、尾張藩邸の敷地内で用いた瓦を、すべて国元の尾張から取り寄せたわけではなかったようだ。

刻印の類例 ここで、第1節で紹介した全国近世瓦刻印集成（埋蔵文化財研究会2017）を参考にしながら、刻印の類例を探してみよう。

「作」字を円形で囲った刻印は、京都市内では、相国寺旧境内でみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-38・39）。京都以外では、東京都の尾張藩麹町邸跡（埋蔵文化財研究会2017：p. 349）や尾張藩上屋敷跡遺跡（埋蔵文化財研究会2017：13-99-241～247，310～312，315，336，363～366），あるいは愛知県の名古屋城三の丸（埋蔵文化財研究会2017：23-4-55），名古屋城西南隅櫓（埋蔵文化財研究会2017：p. 461）などの、尾張藩の国元である愛知県内や、東京都内の尾張藩邸跡で出土している。そのほかにも、奈良県今井町（埋蔵文化財研究会2017：29-11-2）や、岡山県の宝福寺仏殿（埋蔵文化財研究会2017：33-15-47），津山城跡（伊藤ほか2007：189，埋蔵文化財研究会2017：33-2）でも出土している。京都相国寺旧境内でみつかった「作」字刻印瓦や、奈良県と岡山県でみつかったものについては、尾張藩とのつながりがみいだせない。

なお、竹管文状の刻印は京都市内で、相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-1～3・14）。

本部構内から出土した近世瓦

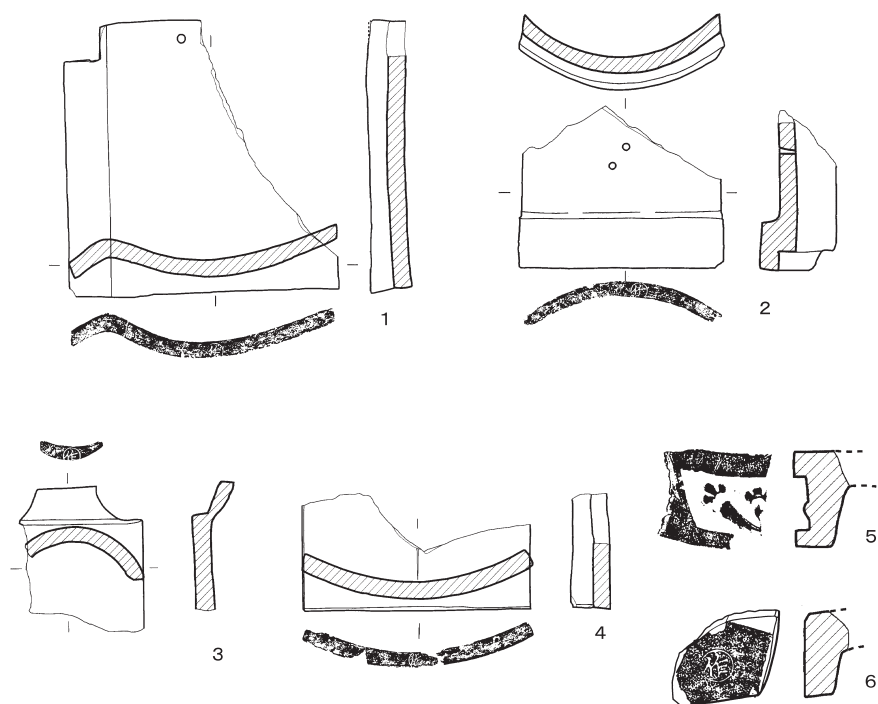


図56 本部構内出土の近世瓦（1：伊藤ほか2007，Ⅱ791，2：Ⅱ804，3：Ⅱ801，4：Ⅱ810，5：Ⅱ789，6：Ⅱ790）縮尺1/8（1～4），1/4（5・6）

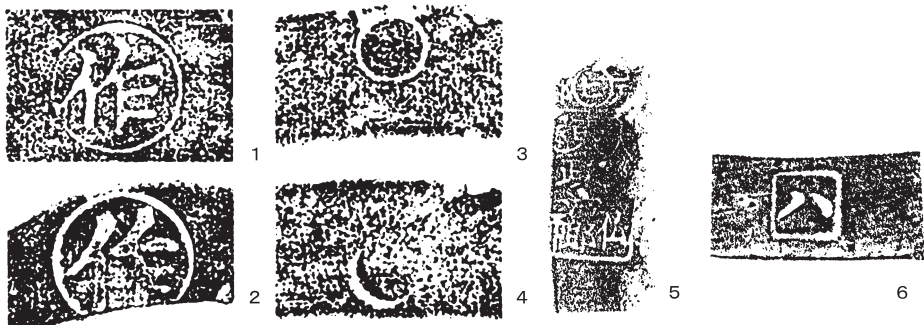


図57 本部構内出土の近世瓦で確認された刻印
（1～4：伊藤ほか2007，表8，5：千葉ほか2006，Ⅰ1085，6：Ⅰ1086）縮尺1/1

4 熊野構内から出土した近世瓦

熊野構内出土の近世瓦 熊野構内においては、2015年におこなわれた調査で、幕末頃のものと考えられる堀の跡がみつかった⁽⁷⁾。前述したように、「改正京町御絵図細見大成」によれば、この地点には徳島藩邸が所在した。よって、みつかった堀は、徳島藩邸の堀であった可能性がある。徳島藩に關係する可能性のある遺物として、徳島藩主であった蜂須賀家の家紋である「卍」紋の瓦がみつかったが、他の家紋をもつ瓦もともに出土しており、考古学の観点からは、「卍」紋瓦1点の出土をもって同地が徳島藩邸であったとは断定できない。

この遺構にかかわって興味深いのは、堀の一部が瓦積によって埋められた状況が確認された点である。瓦積に用いられた瓦には棧瓦のほか、鬼瓦や道具瓦が含まれていた。前述の家紋瓦も、瓦積内でみつかったものである。これらの瓦は二次的に利用されたものと考えられる。この熊野構内の発掘調査で出土した遺物については、現在、報告書作成のための整理作業中であるため、ここでは、瓦の刻印のみを紹介する。

熊野構内出土瓦の刻印 熊野構内の発掘地点において積まれた状態でみつかった瓦に確認された刻印は、以下のようなものである（図58・59）。

刻印は、大きく5種類に分けられる。①花文様のもの、②1字の文字を円形で囲ったもの、③1字を方形で囲ったもの、④2字を方形で囲ったもの、⑤5字以上の文字を方形で囲ったもの、の5種類である。

①の花文様のものは、四弁の花と九弁の花が確認された（図58-1・2）。

②の1字を円形で囲ったものには、「へ」・「ハ」・「十」・「弥」・「元」・「大」・「極」（2点）・「市」（2点）・「長」（2点）の文字のほか、文字不明のものがある（図58-3～15）。また、楕円で「九」字を囲ったものが1点確認された（図58-16）。

③の1字を方形で囲ったものには、「治」と「彦」の字が確認されたほか（図58-17・18）、断片であるために文字が確認できないものが5点ある（図58-19～23）⁽⁸⁾。図58-23の刻印は、文字を陽刻したものと考えられる。

④2字を方形で囲ったものには、「昆（ないし日比）太」・「□八」・「大□」（2点）を縦書きにしたものと（図58-24～27）⁽⁹⁾、「甚私」と横書きにしたものがある（図58-28）。「甚私」の刻印では、文字が陽刻される。

⑤5字以上の文字をもつものには、「御用／京大佛瓦師／井上三右衛門」（2点、図59-



図58 熊野構内出土の近世瓦で確認された刻印 その1 縮尺1/1

1・2)・「□□大佛住瓦師／西村彦右エ門尉」(図59-3)・「大佛瓦□(屋?)／江川喜兵衛」(図59-4)・「大ふつ／次郎」(2点, 図59-5・6)・「□(大)ふつ／□(又)左衛門」(図59-7)・「大ふつ／□(右?)□□」(図59-8)・「京深草瓦師／平岡作兵衛」(図59-10)・「深草瓦師／□□□□」(図59-11)・「ふかくさ／長左□□」(図59-12)などがある。1点は断片であるため読めないが、「大ふつ」の「つ」字である可能性がある(図59-9)。「大仏」や「ふかくさ」の言葉が確認されることから、これらの瓦が、京都において生産されたものであったことがわかる。

刻印の類例 これらの瓦の刻印について、以下で類例を確認しよう。

まず、四弁の花文様の刻印は、相国寺旧境内で出土している（埋蔵文化財研究会2017：26-1-5・6）。

六弁や八弁の花文様の刻印は、京都市内でも確認されるが（埋蔵文化財研究会2017：26-14-37など）、九弁の花文様の刻印は確認できない。それでは、京都市外ではどうかというと、山口県の萩城跡（埋蔵文化財研究会2017：35-1-17）や、岩国城跡（埋蔵文化財研究会2017：35-4-21, 46）などでみつまっている。

「八」字の刻印は、京都市内の公家町遺跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-2-30）。

「十」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内や公家町遺跡、寺町旧域、方広寺跡でも出土した（埋蔵文化財研究会2017：26-1-58, 26-2-15, 26-3-3, 26-14-27）。また、市外では、熊本県の熊本城飯田丸（埋蔵文化財研究会2017：p. 744）や、大分県の毛利家御居間・三府御門・土間・広間の工事でみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：p. 786）。

円囲いに「元」字は、京都市内では類例がない。一方、京都を離れると、熊本県の熊本城飯田丸（埋蔵文化財研究会2017：p. 744）や、御裏五階御櫓跡（埋蔵文化財研究会2017：p. 748）、熊本城跡桜馬場地区（埋蔵文化財研究会2017：p. 753）でみつまっている。

円囲いに「市」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-41・42）。公家町遺跡でもみつまっているが、字体は異なる（埋蔵文化財研究会2017：26-2-38）。また、二条城本丸玄関で葺かれていた瓦の刻印には、字形が同様で、円形の囲いのないものと、字形が異なり、円形の囲いのあるものがある（元離宮二条城事務所1986：図173・図190）。

「長」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内や公家町遺跡でもみつまっているが、それらは楕円で囲われる（埋蔵文化財研究会2017：26-1-44・45, 26-2-35）。

楕円囲いに「九」字の刻印は、京都市内の相国寺旧境内でみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-43）。

文字不明のものに関しては、香川県の丸亀城跡（埋蔵文化財研究会2017：37-15-83）でもよく似た文様のものが出土しているが、こちらも文字は不明である。

「昆（ないし日比）太」銘の刻印は、病院構内の2016年の発掘調査で出土したことが、本年報第2章で報告される。それ以外で京都に類例はない。東京の尾張藩上屋敷跡遺跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：13-99-78, 130, 149, 251, 252, 370）。

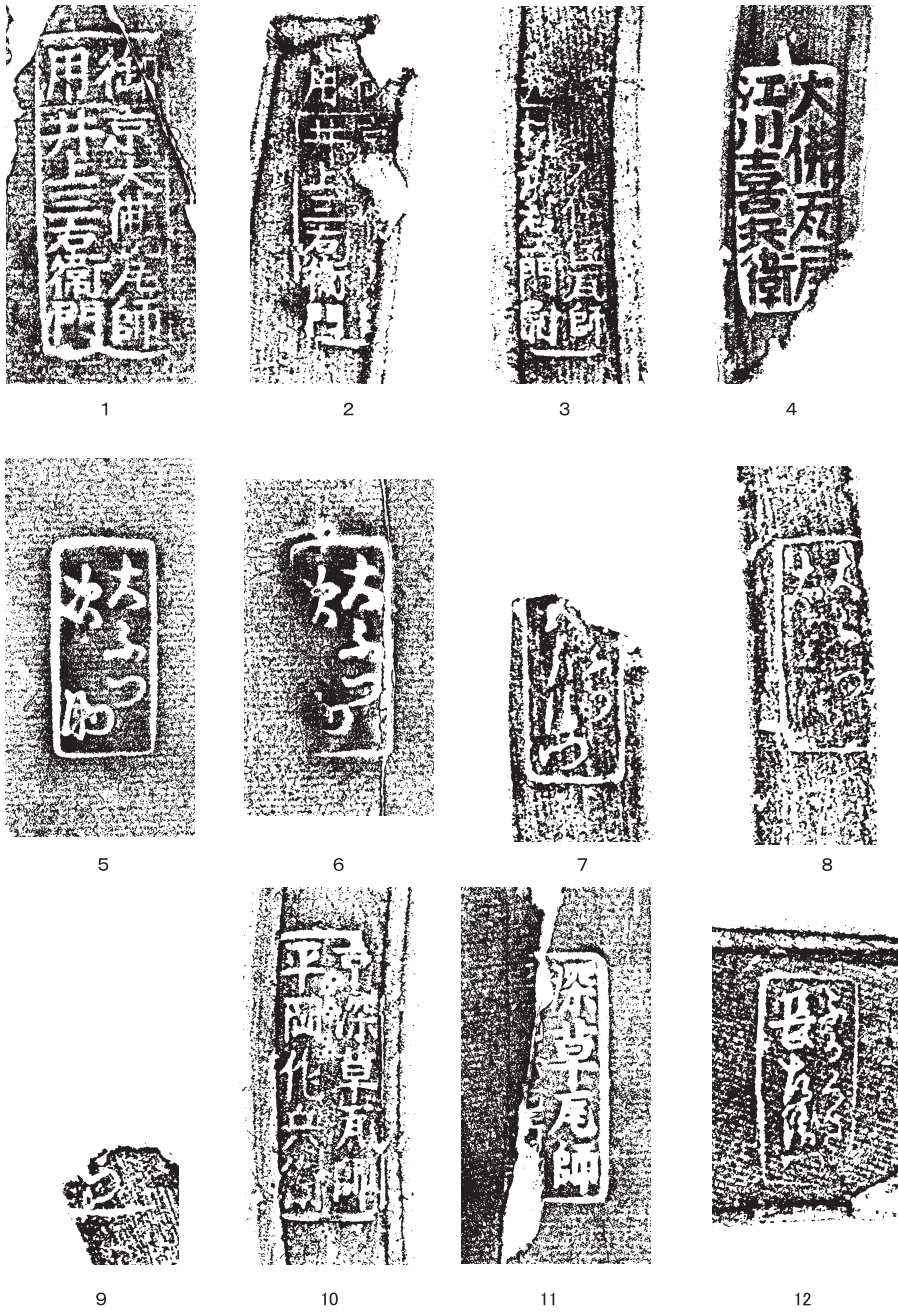


図59 熊野構内出土の近世瓦で確認された刻印 その2 縮尺1/1

「甚私」銘の刻印を持つ瓦は、他に確認できないが、横書きで文字が陽刻される瓦は、大阪府の広島藩蔵屋敷跡（埋蔵文化財研究会2017：27-9）や、広島県内の各遺跡で多く確認される（埋蔵文化財研究会2017：34）。また、香川県の丸亀城跡と愛媛県の今治城跡でも、それぞれ1点確認される（埋蔵文化財研究会2017：37-15-80, 38-1-9）。

「井上三右衛門」の刻印をもつ瓦は、京都市内の知恩院三門においてもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-24）。

「西村彦右衛門尉」の刻印をもつ瓦は、京都市内の二条城本丸御殿玄関でも用いられていた（元離宮二条城事務所1986：図177）。

「大ふつ又左衛門」の刻印は、京都市内の相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-54）。

「平岡作兵衛」の刻印をもつ瓦は、京都市内の相国寺旧境内でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-49・50）。

5 吉田南構内から出土した近世瓦

吉田南構内出土の近世瓦 吉田南構内における発掘調査でも、19世紀代を中心とする包含層（灰褐色土）より、近世瓦が出土した⁽¹⁰⁾。軒棧瓦と菊丸瓦が確認された（図60）。

吉田南構内出土瓦の刻印 刻印には、方形囲いの「大□」字、円形囲いの「作」字、円形囲いの「一」字、囲いなしの「与」字などが確認された（図61）。瓦が出土した地点は、吉田南構内でも北辺に位置し、尾張藩邸の比定地である本部構内と隣接する。第3節でみたような、尾張藩邸にゆかりのある「作」字の刻印をもつ瓦が出土したのは、そのためであろう。

刻印の類例 丸囲いに「一」字は、京都市内で、相国寺旧境内でもみつまっているが、筆遣いは異なる（埋蔵文化財研究会2017：16-1-29・30）。また、伏見奉行所や伏見城跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-21-4・5・7・8, 26-15-6）。

伏見城跡では、囲いのない「与」字の刻印のほか、三角形囲いのものや方形囲いのもの、円形囲いのものがみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-15-8～15）。また、円囲いの「与」字刻印は、相国寺旧境内や公家町遺跡でもみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-35, 26-2-37）。一方で、伏見奉行所や二条城本丸御殿玄関のものは、方形囲いである（埋蔵文化財研究会2017：26-21-254～258, 元離宮二条城事務所1986：図185）。

吉田南構内から出土した近世瓦



図60 吉田南構内出土の近世瓦（1：伊藤2000, I587, 2：I589, 3：I591）縮尺1/4



図61 吉田南構内出土の近世瓦で確認された刻印
（1：伊藤2000図40, a, 2：b, 3：c, 4：d）縮尺1/1

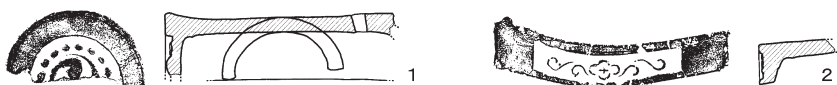


図62 病院構内出土の近世瓦（1：富井ほか2015, II116, 2：II121）縮尺1/8

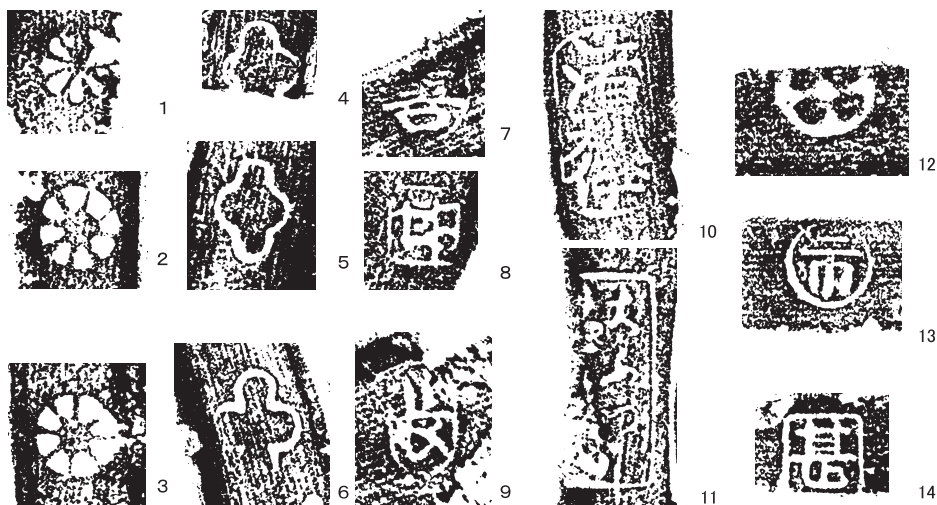


図63 病院構内・病院西構内出土の近世瓦で確認された刻印（1：富井ほか2015, II124, 2：II129, 3：II128, 4：II131, 5：II130, 6：II132, 7：II133, 8：II127, 9：II120, 10：II125, 11：II126, 12：千葉ほか2015, III681, 13：III683, 14：III682）縮尺1/1

6 病院構内・病院西構内から出土した近世瓦

病院構内・病院西構内出土の近世瓦 病院構内・病院西構内からも近世の瓦が出土した。軒丸瓦・軒棧瓦・棧瓦などがみつかった⁽¹¹⁾。瓦には、三巴文などが表される(図62)。

病院構内・病院西構内出土瓦の刻印 刻印には、四弁の花文(図63-12)、八弁の花弁をもつ菊花文様(3点, 図63-1~3)、四弁をつなげたような花文様(3点, 図63-4~6)、「市」字を円形で囲ったもの(図63-13)、「甚」の字を方形で囲ったもの(2点。図63-8・14)、楕円形で囲った「善」の字と考えられるもの(図63-7)、「長」字を楕円形で囲ったもの(図63-9)、「渚□□」を楕円形で囲ったもの(図63-10)、「大ふつ／□□□」を方形で囲ったもの(図63-11)などがある。

刻印の類例 四弁をつなげたような花文様については、それを枠線として用いたものが、方広寺跡出土瓦の刻印でもみられる(埋蔵文化財研究会2017: 26-14-76・77)。

「甚」字の刻印は、二条城本丸御殿玄関の瓦にもみられる(元離宮二条城事務所1986: 図188)。また、公家町遺跡でもみられるが、こちらは円形囲いである(埋蔵文化財研究会2017: 26-2-22)。

7 京都に搬入された瓦

以上では、京都大学吉田キャンパスで出土した瓦の刻印について紹介した。

京都大学から出土した刻印瓦が興味深いのは、何よりも、それらの中に、遠くから運ばれたことを示すものが含まれていることである。これまで先達によって検討されてきたように、北部構内では土佐藩の国元から搬入されたことを示す刻印をもつ瓦が出土し、また、本部構内では尾張藩から運ばれた刻印瓦が出土した(浜崎ほか1995, 伊藤ほか2007)。

しかし、今回、熊野構内から出土した瓦の刻印をみることで、京都にはより様々な地域から瓦が搬入された可能性がでてきた。つまり、京都大学出土瓦の刻印の中には、京都市内には類例がなく、京都を離れた地域に類例がある刻印が、少なからず存在するのである。

まず、九弁の花文様の刻印は、山口県の萩城跡や岩国城跡などでみつまっているものに近く、長州藩や岩国藩と関係がある可能性がある(図58-2)。また、円形囲いの「元」字は、熊本県の熊本城飯田丸や、御裏五階御櫓跡、熊本城跡桜馬場地区でみつかり、熊本藩とのかかわりが想定される(図58-7)。そして、文字不明のものについては、香川県の丸亀城跡からよく似た文様のものがみつかり、丸亀藩とのかかわりが考えら

れる（図58-15）。そして、横書きで文字が陽刻される例は、大阪府の広島藩蔵屋敷跡や広島県内の各遺跡で多く確認されるため、「甚私」の陽刻の印は、広島藩とのかかわりを想定してもよいかもしれない（図58-28）。

なお、「昆（ないし日比）太」の刻印（図58-24）は、東京の尾張藩上屋敷跡遺跡で複数個みつかった。尾張で出土していないことから、江戸とのかかわりをもつ可能性がある。

以上、分析としては不十分なものの、京都大学出土瓦の刻印には、長州藩ないし岩国藩や熊本藩、丸亀藩、広島藩、そして、江戸とかかわりを示す可能性のあるものが存在する。

8 京都の瓦工と刻印

前節では、京都に搬入された可能性のある瓦をみた。京都大学構内遺跡出土の近世瓦の刻印を検討する際に忘れるべきでないのは、それらの中に、京都産の瓦であることを示す刻印が多数確認されることである。本節では、京都で製作された瓦に目を向ける。

京都で製作されたと考えられる瓦の刻印の中には、瓦工名を姓名ともに示すものや、さらには、瓦工がどこを拠点に瓦の生産をおこなっていたかを示すものがある。製作者が特定できる点で、非常に便利な遺物であるといえよう。ところが、京都大学構内遺跡でみつかった刻印の多くは、簡単な文様や1字の文字のみを示すだけのものである。これら、単純な刻印をもつ瓦の製作者を推定することは、可能なことであろうか。

1字の刻印をもつ瓦の製作者を考察する上で手掛かりとなるのが、ある特定の建物の屋根を葺いていた瓦の集合である。ある建物を建立したり、修理した際に、屋根に新たに葺かれた瓦は、1つの工房でなかったとしても、少数の工房で生産されたと考えられる。また、すべての瓦に拠点と姓名を示す印を捺すことは大変であったろうから、代表的な瓦に瓦工についての詳細な情報を示し、残りの瓦には、省略した印を捺したことが想定される。

以上の話は、あくまで想定の話であるが、そのような作業仮説を設けた場合に、説明のしやすい刻印の例がある。それは、二条城本丸御殿玄関を葺いていた瓦の刻印である（元離宮二条城事務所1986）。興味深いのは、二条城の屋根を葺いていた瓦の刻印に、「平安城大仏住瓦師西村彦右衛門尉」、「京都／西彦」、「大仏／西彦」、「彦」などが確認されることである（元離宮二条城事務所1986：図172・図174・図177・図179）。刻印から、「西村彦右衛門」は京都の大仏に住んでいた瓦工であることがわかる。また、彼の名前は、瓦の窺書きでも確認される。窺書きには、「嘉永元年 戊申六月吉日／皇都大佛住／御用大瓦工／西村彦右衛門／瓦師細工人／由兵衛作之□」と示される（元離宮二条城事務所1986：図

134～137)。この窺書きから、西村彦右衛門が、嘉永元年（1848）頃、つまり、19世紀半ば頃に活動していたことがわかる。この例から考えて、瓦工の中には、自身の姓名の一部ないし1字のみを示す印を、瓦に捺した者がいたようだ。

「西村彦右衛門」の名をもつ刻印と「彦」字の刻印は、実は、京都大学の熊野構内でも確認された。よって、京都大学でみつかった「彦」字の1字の刻印をもつ瓦も、19世紀半ばに京都で活動した西村彦右衛門によって生産された瓦である可能性が高い。

瓦工の中には姓名の1字を刻印に用いた者がいた、とする観点から、ほかの遺跡から出土した刻印の例をみてみよう。まず、相国寺旧境内では、「京深草瓦師平岡作兵衛」の刻印瓦とともに、「作」1字の刻印瓦がみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-1-38・39・49・50）。また、公家町遺跡では、「ふかくさ市右衛門」の刻印瓦とともに、「市」字の刻印瓦がみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-2-38・47）。これら複数の例があることから、京都の瓦工の中には、自身の名前の中の1字を示す印を瓦に捺す者が、複数人存在したと考えられる。このように考えるならば、ほかの1字の刻印についても、瓦工の名前の一部を表す可能性が高いのである。

熊野構内からは、「治」字や「長」字の刻印が確認された。一方で、同じ左京区内の公家町遺跡では、「五位川治兵衛」や「山之内長兵衛」の刻印がみつまっている（埋蔵文化財研究会2017：26-2-51・52）。「治」字の刻印は五位川治兵衛と、「長」字の刻印は、山之内長兵衛を示すのであろうか⁽¹²⁾。

吉田南構内では「与」字の刻印瓦がみつかった。一方で、上京区に所在する本隆寺本堂の解体工事では、「洛東大佛住人西村与三右衛門」の名前が刻まれた鬼瓦が確認された（京都新聞社2017）⁽¹³⁾。「与」字はこの大仏の瓦工と関係があるかもしれない。なお、本隆寺の鬼瓦には、万治2年（1659）の年号も刻まれていたようだ。西村与三右衛門が、17世紀半ばに活動した瓦工であったことがわかる。

ところで、土佐藩邸跡に比定される北部構内でみつかった刻印瓦について、それらの多くが土佐藩で生産されたものであること、そして、それらの瓦の中に大阪の住吉で生産された瓦も混じることは、第2節で述べた通りである。しかし、北部構内でみつかった瓦の刻印の中には、土佐や住吉とのつながりがみいだされないものがある。それは、「福瓦作」と書かれていると考えられた刻印である。この刻印とかかわりのありそうなものに、京都市内の教王護国寺や大徳寺山門、知恩院山門において確認された、「福田加賀」、「瓦大工福田加賀守」の刻印をもつ瓦がある（埋蔵文化財研究会2017：26-17-3，26-22，26-24）。

これまでの検討とは反対に、京都大学出土瓦の刻印から、他の遺跡出土の1字の刻印瓦の瓦工名を推定することもできる。公家町遺跡や二条城本丸御殿玄関では、楕円形囲いの「喜」字の刻印がみつかった（埋蔵文化財研究会2017：26-2-23、元離宮二条城事務所1986：図189）。一方で、熊野構内では、「大佛瓦□（屋？）／江川喜兵衛」の刻印瓦がみつかった。「喜」字の刻印は、江川喜兵衛の名前の1字を用いたものである可能性がある。

一方で、1字だけでは特定の瓦工と結びつけられない例もある。熊野構内では「九」字の刻印瓦がみつかったが、京都市の公家町遺跡からは「左□ 九良兵衛」の刻印瓦が（埋蔵文化財研究会2017：26-2-50）、また、寺町旧域からは「ふかくさ九良右衛門」の刻印瓦がみつかった（埋蔵文化財研究会2017：26-3-7・8）。このように、「九」の字を名前にもつ瓦工が複数人いた場合、瓦工の推定は難しくなる。

同じく、熊野構内や病院西構内でみつかった「市」字の刻印についても、瓦工との結びつけは容易でない。先に、公家町遺跡で、「市」1字の刻印と「ふかくさ市右衛門」の刻印がともに確認されることを述べたが、「市」字を名前の一部にもつ瓦工は、市右衛門以外にも複数確認される⁽¹⁴⁾。「平井市右衛門」（京都府2009：図275③）⁽¹⁵⁾、「青山市郎右衛門」⁽¹⁶⁾、「青山市左エ門」（埋蔵文化財研究会2017：26-24）⁽¹⁷⁾、などである。熊野構内や病院西構内でみつかった「市」字は、これらの瓦工のいずれかとかかわりがあると考えられる。

また、病院構内と病院西構内でみつかった「甚」字の刻印に対応する名の瓦工として、「甚助」や「甚兵衛」の名が知られる。「甚助」の名は、本願寺大師堂修理の際に確認された。大師堂の南西隅棟二の獅子口の瓦には、篋書きで、「文化七庚□年林鐘上旬 御用瓦工 森田平兵衛 細工人甚助」と、また、北西隅棟一の獅子口の瓦には、「文化七庚午歳五月吉旦 御用瓦師 森田平兵衛 細工人甚助」と書かれる（京都府2009：p. 134、図257）。森田平兵衛は大仏の瓦工であるので、甚助も大仏の瓦工と考えられよう（京都府2009：図260④、図261、京都府1984：図版184など）。なお、文化7年は西暦1810年であり、甚助もまた、19世紀はじめ頃に活動した瓦工であることがわかる。「甚兵衛」の名は、2017年度の京都大学女子寮の発掘調査で、攪乱の中からみつかった瓦の刻印にみられ、「深草」の瓦工であることまでがわかる。

このように、刻印の1字で瓦工の名前の一部を示すと考えられるものもあるが、そのような刻印の使い方と一致しない明確な例も存在する。それは、京都大学熊野構内でも出土した「十」字の刻印にかかわるものである。「十」字の刻印は、本願寺大師堂や六角堂で、「大佛瓦町瓦師井上重良兵衛」の刻印とともに、同じ瓦に捺されている（京都府教育委員

会編2009：図版261・278，埋蔵文化財研究会2017：26-18-2）。このように，1つの瓦に同時に捺されたことから，「十」字の刻印は，大仏の瓦工の井上重良兵衛とかかわりがあると考えられる。重良兵衛の名は，本願寺大師堂の瓦の箋書きにもみられる。それによれば，彼は，18世紀前半に京都で活動した瓦工である（京都府2009：図275③，p. 135）。

9 ま と め

以上，京都大学の北部構内・本部構内・熊野構内・吉田南構内・病院構内・病院西構内の調査でみつかった近世瓦の刻印について紹介した。これまでの検討で，土佐藩や尾張藩の国元から搬入された瓦が北部構内や本部構内でみつかることがわかっていたが，今回，新たに吉田キャンパス全体で出土した瓦の刻印をみることにより，また，全国近世瓦刻印集成（埋蔵文化財研究会2017）などを参考にしながらその類例を確認することにより，新たな見解が得られた。

まず，瓦の中には，これまでに存在の知られていた土佐藩や尾張藩にかかわる刻印をもつものだけでなく，他の藩とかかわりのある可能性のある刻印をもつものが存在することが確認された。具体的には，九弁の花文様の刻印をもつ瓦は，山口県内でも出土しており，「元」字を円形で囲った刻印をもつ瓦は，熊本県内の各遺跡でも出土している。また，文字不明の刻印をもつ瓦は，よく似た例が香川県内でみつまっている。「昆（ないし日比）太」の刻印をもつ瓦は，京都大学構内遺跡以外では，東京都内でのみみつまっている。そして，横書きで文字が陽刻される刻印をもつ瓦は，広島県内などの広島藩にかかわる遺跡から出土している。十分な分析を踏まえた結果ではないものの，今後は，京都市内でみつかる近世瓦の刻印について，全国規模での比較が必要であろう。

また，京都でつくられた瓦について，1字のみの刻印から，瓦工を比定する試みをおこなった。1字の刻印から想定できる瓦工を下に列挙する。

「彦」字：西村彦右衛門

「作」字：平岡作兵衛

「市」字：ふかくさ市右衛門，平井市右衛門（大仏？），青山市郎右衛門，青山市左エ門

「治」字：五位川治兵衛

「長」字：山之内長兵衛

「与」字：西村与三右衛門

「甚」字：（森田？）甚助，甚兵衛

「喜」字：江川喜兵衛

「九」字：九良兵衛、ふかくさ九良右衛門

「十」字：井上重良兵衛

1字の刻印以外にも、瓦工が想像できるものに以下のものがある。

「西彦」：西村彦右衛門

「福瓦作」：福田加賀守

十分な分析を経た見解とはいえないものの、1字の刻印が瓦工の名前の一部を示したものであると想定することで、近世瓦工についての検討が大きく進められる可能性がある。京都の古寺や古建築の屋根を葺く瓦の刻印や箋書きを、より広範に確認することで、刻印に表された瓦工の活動した時期や場所を、より詳細に検討することが可能であろう。

ただし、このように想定した場合、京都大学でも出土する「作」字の刻印については問題が残る。京都で使われた「作」字瓦には、少なくとも2系統が存在したことになるためである。1つ目の系統は、これまでに議論されてきた、尾張藩邸跡からみつかった、尾張で生産された「作」字の刻印瓦である。もう1つの系統が、今回その可能性を提示した、京都深草の平岡作兵衛が生産したものである。さらに、京都を離れると、これまでにも指摘されてきたように、「作」字の刻印瓦は、岡山県内の遺跡でもみつまっている（伊藤ほか2007：189）。「作」字を円形で囲った印を瓦に捺す瓦工が、日本国内に少なくとも3系統いたことになる。今後、京都市内で出土する「作」字の刻印瓦を扱う場合は、この刻印に複数の系統が存在する可能性があることを念頭に置きながら、検討をおこなう必要がある。

近世の考古学の研究において、瓦の刻印の検討がもつ潜在性は大きなものである。今後の研究の進展に期待したい。

謝辞 本稿は、以下の2つの考察をもとに作成したものである。1つは、2016年度に開催された京都大学総合博物館特別展『文化財発掘Ⅲ—激動の幕末と京大キャンパス—』の企画を、文化財総合研究センターの笹川尚紀氏とともに担当した際におこなった考察であり、もう1つは、第66回埋蔵文化財研究集会の誌上発表の準備に際しておこなった考察である。これらの機会を与えてくださったのは、岩崎奈緒子先生をはじめとする京都大学総合博物館の方々と、市川創氏をはじめとする埋蔵文化財研究会関西準備会の方々である。また、本稿では、筆者が副担当を担った2015年度の熊野構内の発掘調査で出土した刻印瓦を中心的な分析対象として扱った。整理作業中の未発表の遺物を本稿でとりあげるにあた

り、文化財総合研究センターの千葉豊氏および、発掘調査の担当の富井眞氏より、ご理解をいただいた。また、やはり、筆者が副担当を担う2017年度の百万遍女子寮の発掘調査で出土した刻印瓦を、本稿で引用するにあたっては、調査の担当の笹川尚紀氏より、ご理解をいただいた。なお、熊野構内出土の瓦の整理にあたっては、長尾玲氏より全面的なご協力をいただいている。上記の方々に、記して感謝申し上げます。

〔注〕

- (1) 幕末より前の時代に描かれた京都の絵図としては、「元禄京都洛中洛外大絵図」(元禄(1700年頃))や「天明大火図」(天明8年(1788))などがあげられる(京を語る会1975)。これらの絵図をみると、吉田周辺には、尾張藩邸や土佐藩邸は描かれない。よって、「改正京町御絵図細見大成」に描かれる尾張藩邸や土佐藩邸は、幕末になってから建てられたものであると考えられる。
- (2) なお、本論で示した、それぞれの藩邸の建造年と廃棄年、そして、その来歴などにかかわる文献史料の検討に基づく見解の多くは、2016年度京都大学総合博物館特別展「文化財発掘Ⅲ―激動の幕末と京大キャンパス―」の準備に際して、文化財総合研究センターの笹川尚紀氏より教示いただいたものである。
- (3) 北部構内においては幕末の遺構が、109地点(浜崎1983:26)、276地点(伊藤ほか2005:178-179)、208地点(浜崎ほか1995:88-105)の3箇所で見出された(図版1)。
- (4) 北部構内の208地点で見出された土佐藩邸にかかわると考えられる遺構からは、右棧瓦(軒瓦を含む)が214.2点みつかり、左棧瓦(軒瓦を含む)は161.3点みつかった(浜崎ほか1995:102)。
- (5) 2016年の病院構内436地点(図版1)の発掘調査で出土した「住瓦庄」の刻印をもつ瓦については、本年報紀要の第2章および笹川氏の論考の中で紹介されている。詳細については、それらを参照いただきたい。
- (6) 本部構内においては幕末の遺構が、75・89地点(五十川1981:23-25)、188地点(西川ほか1990:2)、277地点(千葉ほか2006:69-87)、293地点(清水ほか2006:237-238)、296地点(伊藤ほか2007:155-200)、329e地点(千葉ほか2009:47)、335地点(千葉ほか2009:47)、336a地点(千葉ほか2009:47)、336b地点(千葉ほか2009:47)、383地点(上原ほか2014:2)、395地点(上原ほか2014:2)、403地点(笹川2016:174)の13箇所で見出された(図版1)。
- (7) 幕末頃のものと考えられる堀の遺構が見つかったのは、熊野構内の435地点である(図版1)。
- (8) 断片的で文字が確認できないものに関しては、本来2字以上のものであった可能性がある。しかし、ここでは仮に、それらを1字の刻印に含めて紹介する。
- (9) 図58-25~27については、1字だけ、あるいは3字以上の刻印であった可能性がある。しかし、ここでは仮に、それらを2字の刻印に含めて紹介する。
- (10) 吉田南構内においては近世瓦が、238地点から出土した(伊藤2000:72, 74, 図版1)。
- (11) 近世瓦は、病院構内では385地点で(富井ほか2015:150-152)、病院西構内では379地点(千葉ほか2014:62)と398地点(千葉ほか2015:194-199)で出土した(図版1)。
- (12) ただし、2016年の病院構内の調査で、「五」字の刻印をもつ瓦が見つかった。このような刻印の例があることから、五位川治兵衛は、名前の一部である「治」字の1字刻印でなく、姓の

一部である「五」字の1字刻印を用いていた可能性も考えられる。「五」字の刻印については、本報紀要の第2章で紹介されているため、詳細についてはそちらを参照いただきたい。なお、「五」字の刻印瓦は、京都大学の構内以外では、左京区の公家町遺跡からも出土した（埋蔵文化財研究会2017：26-2-27～29）。

- (13) 京都市上京区に所在する本隆寺でおこなわれた解体修理において、16点の鬼瓦の中で、13点に鬼瓦の製作者の名前が刻まれているのが確認された。それらのうちの6点には、「伏見深草住瓦師青山市郎右衛門」の名前が刻まれており、また、残りの7点には「洛東大佛住人西村与三右衛門」の名前が刻まれていたようだ（京都新聞社2017）。京都を代表する2箇所の瓦生産拠点である深草と大仏の瓦工が分担して、本隆寺の鬼瓦を製作していたことがわかった点でも興味深い発見である。
- (14) なお、「ふかくさ市右衛門」の名前は、公家町遺跡出土の瓦のほかにも、本願寺本堂の瓦でも確認される（京都府1984：図版184）。
- (15) 平井市右衛門の名は、本願寺大師堂の平瓦に窺書きされる。窺書きには、「寶曆十庚辰歳六月／御造工／山城國愛宕郡／大佛住人／平井市右衛門末孫／井上重良兵衛俣／平井山三郎作」と示される（京都府2009：図275③，p. 135）。孫の平井山三郎が瓦をつくった宝暦10年は、西暦の1760年にあたる。よって、2代遡る祖父である平井市右衛門の活動時期は、示された年号より数十年古く、18世紀前半頃であったと考えられる。平井山三郎と同じく、大仏を拠点とする瓦工であったと考えられる。
- (16) 青山市郎右衛門は、先述の2017年の京都市上京区に所在する本隆寺の解体修理に際して確認された（京都新聞社2017）。鬼瓦には、万治2年（1659）の年号が刻まれていたようである。これらから、青山市郎右衛門が17世紀半ば頃に活動した、深草の瓦工であったことがわかる。
- (17) 知恩院三門において、「山州深草／青山市左エ門」と「深草住青山市左エ門」の刻印が確認された（埋蔵文化財研究会2017：26-24）。なお、市左衛門の名は、本願寺大師堂の隅棟獅子口・南東隅・稚児棟の瓦の窺書きでも確認された（京都府2009：図256②③，p. 134）。その窺書きには、「干時安政六己未天四月謹造之／御用瓦司青山市左衛門（花押）」と刻まれる。安政6年は、西暦の1859年にあたる。よって、市左衛門は19世紀半ばに活動した深草の瓦工と考えられる。

〔参考文献〕

- 五十川伸矢 1981年「第4章 京都大学本部構内A T27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』pp. 21-34.
- 伊藤淳史 2000年「第2章 京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』pp. 3-80.
- 伊藤淳史・富井眞・外山秀一・上中央子 2005年「第3章 京都大学北部構内B C28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』pp. 133-208.
- 伊藤淳史・梶原義実 2007年「第3章 京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』pp. 125-200.
- 上原真人・千葉豊 2014年「第1章 2011・2012年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011・2012年度』pp. 1-2.
- 京都新聞社 2017年「350年前鬼瓦に職人2人の名 京都・本隆寺本堂」『京都新聞』2017年10月25日 記事 URL：<http://www.kyoto-np.co.jp/sightseeing/article/20171025000016>（最終確認日：2017年12月17日）
- 京都府教育庁指導部文化財保護課編 1992年『重要文化財知恩院三門修理工事報告書』

京都大学構内遺跡出土の近世瓦と刻印

- 京都府教育委員会 1984年『重要文化財本願寺本堂（阿弥陀堂）修理工事報告書』
- 京都府教育委員会 2009年『重要文化財本願寺大師堂修理工事報告書』
- 京を語る会（編） 1975年『近世京都絵図十種』
- 笹川尚紀 2016年「第5章 京都大学本部構内A T22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』 pp. 169-187.
- 清水芳裕・千葉豊 2006年「第4章 京都大学病院構内・本部構内の立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』 pp. 235-238.
- 千葉豊・伊藤淳史・富井眞 2009年「第5章 京都大学構内における分布調査・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』 pp. 41-54.
- 千葉豊・阪口英毅 2006年「第2章 京都大学本部構内A T21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』 pp. 3-96.
- 千葉豊・長尾玲 2014年「第2章 京都大学病院構内A H12区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011・2012年度』 pp. 3-68.
- 千葉豊・長尾玲 2015年「第4章 京都大学病院構内A H13区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』 pp. 157-202.
- 富井眞・長尾玲 2015年「第3章 京都大学病院構内A F17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』 pp. 123-156.
- 西川幸治・久馬一剛・清水芳裕・森下章司 1990年「第1章 1987年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』 pp. 1-4.
- 浜崎一志 1983年「第4章 京都大学北部構内B D30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』 pp. 25-30.
- 浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫 1995年「第4章 京都大学北部構内B A28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』 pp. 65-125.
- 埋蔵文化財研究会 2017年『幕藩体制下の瓦—近世都市遺跡における生産と流通』第66回埋蔵文化財研究集会 発表要旨・資料集
- 元離宮二条城事務所 1986年『重要文化財二条城本丸御殿玄関修理工事報告書』第7集